

ヘロドトスの地誌とオリエント

『歴史』が示唆するイスラーム到来以前の西アジアの伝統

紀元前五世紀に書かれたヘロドトスの『歴史』は、ペルシア戦争をヨーロッパたるギリシアとアジアたるペルシアの決戦として描き出した古典である。現代の読者から見ると、それはヨーロッパとアジアを明確に区別しつつ、両世界の対立を具体的な戦争に即してくつきりと提示した書物である点が注目される。それに加えて十九世紀の欧米では、前者が標榜する民主主義と後者が堅持する専制は相容れない政治体制である、というメッセージ性を持った古典としても読まれていた。

私は米国の外交政策の思想的ルーツに関する最近の論考でこれらの点についてふれ、ヘロドトスの『歴史』における民主主義と専制についての議論に論及したのであったが、『歴史』は実は、戦争史といった政治学的関心にとどまらない射程と叙情性を備えた古典であり、その不思議な魅力を一部でも語らずにはいられぬ抑えがたい

衝動を覚えたため、この小文をしたためるものである^③。その魅力の一つは、同書の地誌的な記述にある。

三人の兄弟「ガウアネス、アエロポス、ベルディッカス」はマケドニアの他の地域に着き、ゴルディアスの子ミダスの園と呼ばれる場所の近くに住みついた。このミダスの園には自生する薔薇があり、花の一つ一つに六十の花弁があり、他の薔薇に優る芳香を放つ。・・・この園の上方には、厳しい寒気のために登ることの不可能なベルミオンという山が聳えている。（巻八）^④

一例にすぎないが、この僅か数行によって読者はミダス王の黄金の伝説^⑤を思い浮かべながら、屹立する高山の冷気と霧が下りてくる幽玄な薔薇園にごく自然にいざなわれる。そして花びらが重なり合

森まり子

う世にもかぐわしい「マケドニアの薔薇」は、ベルディッカスの王位獲得の物語にひそやかな美しさと残り香を余韻として残す。

「ミダスの薔薇」はヘロドトスの地誌的叙述の中でも神話的な美しさをたたえた挿話であり、歴史的というよりも文学的な性格を否めないが、全般に彼の地誌的叙述は古代オリエント史研究における重要な史料とされている。幅広く旅行したヘロドトス⁶は実際に見聞した事を地誌的叙述に織り込んでいるのであるが、本来ペルシア戦争を描く事を目的とした書物に、様々な人々の風習を含む広範な地誌的叙述が混じっている背景には、人間社会における「慣習の強さ」が歴史を動かす要因であると見るヘロドトスの透徹した史眼があったと思われる。その慣習の強さは、例えばペルシアが専制にこだわって民主制を採用しなかったなどの実例として描き込まれると共に、「慣習の力はこのようなもので、私にはピンダロスが『慣習こそ万象の王』と歌ったのは正しいと思われる」(巻三)⁷という彼の持論の形でも強調されている。

ヘロドトスの『歴史』における地誌の魅力を語り尽くすのは難しいが、この小文ではその地誌的叙述の中でもオリエント、特に西アジアに焦点を当て、イスラーム到来以前の古代西アジアの伝統について彼の叙述が示唆する点を幾つか拾ってみたい。

まずエジプトについては、一つ一つの慣習に多くの紙幅が割かれている。

適格の標識のついた牛を、犠牲を行なうべき祭壇に曳いてゆ

き、火を燃し、それから祭壇の上にさしのべた牛の頭上に酒をふりかけ、神の名を呼んでから牛を屠る。そして屠った後その首を切り落すのである。牛の胴体は皮を剥ぎ、切り落した首はいろいろの呪詛をかけた後、市場があつて定住のギリシア商人がいるところでは、その首を市場へ運んで売り払い、ギリシア人のいないところでは河へ捨てる。牛の首に呪いをかける時には、生贄を捧げる自分たち、乃至はエジプト全体に何か禍いが起る場合には、この首にその禍いが転ずるように、といつて祈るのである。生贄に供される獣の首の扱い方や酒を注ぐ方式は、すべてのエジプト人がどの犠牲式においても同じように守っている慣習であり、エジプトでは牛以外の動物でもその首を食用にする者が一人もないのは、この風習から来ているのである。

犠牲獣の内臓をとり出して焼く方式は、それぞれの犠牲式によつて異なる。そこでは、エジプトで最高の神と崇められる女神のために祝われる、これまたエジプト最大の祭について述べることにしよう。

牛の皮を剥ぐと祈願をしたのち、はらわたをすつかりとり出し、ほかの内臓と脂身はそのまま体内に残し、四肢、尾骶骨、肩頸部を切り取ってしまう。こうしてから残った牛の胴体に清浄なパン、蜂蜜、乾葡萄、いちじく、乳香、没薬その他の香料を詰め、その上でオリーフ油をたっぷりかけて焼くのである。エジプト人は犠牲式を行なう時はあらかじめ断食をする。生贄が焼ける間、一同は自分の体を打つて哀悼の意をあらわす。打ち

終ると生贄の残った部分で宴を張るのである。

(卷二、傍点引用者)⁽⁸⁾

この部分にある犠牲式と断食は、後代のイスラームにおける犠牲祭(イード・アル・アドハ)と断食の習慣を思わせる。又生贄が焼ける間の哀悼の表し方は自分の体を打つというものであるが、これは今日シリア派ムスリムが行っているアーシューラーの行事におけるフサインの非業の死を悼む際の「体を打つ」という集団的行為に正に似ている。この様に古代エジプトでの死者の哀悼儀式が後代のアーシューラーの哀悼儀式と酷似した方法で行われていた事は、ヘロドトスの次の叙述(傍点部)から更に明らかになる。

エジプトにおいて死者の哀悼の儀式や葬儀は次のようにして営まれる。

エジプトでは名ある人間が死ぬと、死人を出した邸の女たちは全部頭あるいは顔にまで泥を塗りつけ、遺骸は邸の内に残したまま、肌脱ぎになつて着物は帯で留め、胸乳を露わし、われとわが、胸を打ちながら町中を練り歩く。死者の縁者の女たちもみな彼女らに同行するのである。一方男たちも同様に肌脱ぎになつて胸を叩いて悲しみを表わす。それがすむと、そこで遺骸をミイラにする場所へ運んでゆくのである。

(卷二、傍点引用者)⁽⁹⁾

エジプトの部分でイスラーム化以降の習慣との連続性を感じさせるその他の記述は、豚の忌避と割礼に関するものである。まず豚の忌避について述べると、イスラーム教と、それより発祥の古いユダヤ教では豚肉食を禁忌とする習慣があるが、少なくとも当時(紀元前五世紀)のエジプトでは既に豚が忌避されていた旨をヘロドトスは記しているのである。

豚はエジプトでは穢れた獣と考えられている。エジプト人は通りすがりに豚に触れるようなことがあると、着物をきたまま河へとび込んですつかり体を漬けてしまう。またエジプトでは豚飼だけが、たとえ生粋のエジプト人であっても、エジプト内のどの神殿にも入ることができず、豚飼には誰一人娘を嫁にやろうとせず、嫁をとることも望まない。それで豚飼は同業者同士の間で嫁のやりとりをするのである。

エジプトでは一般に豚を神に生贄として捧げることを禁じているが、ただセレネ(月の神)とディオニュソスだけには同じ時、すなわち同じ満月の日に豚を犠牲にしてその肉を食べる。……(卷二)⁽¹⁰⁾

また、イスラーム世界で伝統的に行われる様になる割礼についてヘロドトスは、それが当時のエジプトでは既に古い風習であったと述べている。

・・・さらに有力な根拠となるのは、世界中でコルクス人とエジプト人とエチオピア人だけが昔から割礼を行なっている点である。フェニキア人およびパルステイナのシリア人は、その風習をエジプト人から学んだことを自ら認めているし、テルモドンおよびバルテニオス両河畔に住むシリア人および彼らと隣接するマクロネス人は、最近になってこれをコルクス人から学んだといっている。要するに世界で割礼を行なうのは右の民族だけで、しかもその方法は明らかにエジプト人と同じなのである。当のエジプト人とエチオピア人とは、どちらが他から学んだのかは私にも判らない。いずれにせよ彼らの国ではそれは明らかに古い風習だからである。右の諸民族がエジプトと通航の結果その風習を学んだという私の見解にとつては、次の事実も有力な証拠となる。つまりフェニキア人でもギリシアと交流のある者は、性器の扱いはエジプト人に倣わず、子供たちに割礼を施さないのである。

(巻二)⁽¹²⁾

ヘロドトスのこの記述が正しいとすれば、イスラーム世界における割礼の習慣は古代エジプトやエチオピアに古くから存在していた風習を受け継いだ可能性⁽¹³⁾がある事になる。ここまでのところを総括すると、犠牲祭や断食、哀悼儀式の方法、豚の忌避や割礼など今日イスラームと一般に結び付けて考えられがちな慣習の幾つかは、実はその起源に於てイスラームの発祥よりはるかに古く、イスラーム到来以前の西アジアで既に行われていた同種の慣習をイスラームが

継承したにすぎないという可能性がヘロドトスの叙述から示唆されるのである。

次にアラビアであるが、アラビア人の性格についてヘロドトスは次の様に指摘している。

アラビア人ほど盟約を重んずる民族は世界でも他に例がない。彼らが盟約を結ぶ方法はこうである。盟約を交そうとする者とは別の第三者が両者の中間に立ち、鋭利な石で盟約をしようとする者の掌の親指のあたりを切り、それから双方の着物の髭をむしりとして、両人の間に置いてある七個の石にこれで血を塗りつける。こうしてからディオニュソスとウラニアの名を唱える。・・・

(巻三)⁽¹⁴⁾

西アジアで生まれたセム的一神教——ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教——はいずれも神と人との契約という概念を基礎にしており、イスラームでは商取り引きや結婚など生活全般にわたって契約を重んじる傾向が見られるが、「盟約を重んずる」慣習は実はイスラーム到来以前の古代アラビア人の間に既にあつた事が右の記述から窺われる。前述の豚の禁忌や割礼などの箇所もそうであるが、「何がイスラーム特有であつて、何が実はイスラーム特有でないのか」という、ある宗教の性格を歴史的に理解する上での本質的な問題、すなわち八古代からの連続と断絶Vを現代人に再考させる記述であると言えよう。

異彩を放つのはアラビアの不思議さについてのヘロドトスの記述である。少し長いが引用してみたい。

次に南方では、人類の住む最末端はアラビアで、乳香、没薬、カシア、シナモン、レダノンの生育するのは世界でこの地域のみである。没薬を除いてすべてのこれら香料の採取には、アラビア人は容易ならぬ苦勞をする。アラビア人は乳香を採取するのに、フェニキア人がギリシアへ輸出しているステュラクス香を焚く。・・・乳香を産する樹はそのどの株にも、形は小さいが色はとりどりの有翼の蛇が無数に群がってこれを衛つているからで、これはエジプトを襲う蛇と同類のものであるが、これを樹から追ひ払うにはステュラクスの煙をもつてする以外に方法がないのである。

これもアラビア人の話であるが、かりにこの蛇の場合に蝮に起る事象と同様なことが起らなければ・・・国中がこの蛇で充滿するであろうという。思うになにか神の摂理の如きものがあつて・・・性臆病で他の餌食とされるような生物は食い尽されて絶滅するのを防ぐためにすべて多産に創り、獐猛で害毒を及ぼすようなものは、その繁殖力を弱められたのであろうか。・・・

このようなわけで、もし蝮もアラビアの有翼の蛇も、その本来の習性どおりに繁殖するとしたならば、とうてい人間が棲息することは不可能になるであらう。ところがこの蛇は一番ずつ

交尾して雄が受精に入り、精液を射出すると、雌は雄の頸元に噛みついて離れず、これを食い尽して終うまで離さない。雄蛇は右のようにして死ぬのであるが、雌も雄に対して犯した罪の罰を次のようにして受ける。それはまだ母の胎内にある子蛇が、父の仇とばかり母の体を食うのであつて、胎内の子は母胎を食い破つて外へ出てくるのである。

一方人間に害を加えない他種の蛇は産卵しこれを孵化して驚くべく多数の子を作る。蝮はこの土地にも棲息するのに反して、有翼の蛇はアラビアに集中しており他の土地には棲息していない。非常に多数いるかのごとく見えるのはそのためである。

アラビア人が乳香を採取する仕方は右のとおりであるが、カシアは次のようにして採る。両眼だけを残し、全身および顔を牛皮やその他の獣皮で被い隠した上で、カシアを採りにゆく。カシアはあまり深くない湖の中に生ずるが、湖の周辺および湖中には、蝙蝠に酷似した翼のある動物が巣くつているもののごとく、これが不気味な鳴き声をあげまた恐ろしく手強いのである。この動物を眼から払いながらカシアを摘みとらねばならぬ。

アラビア人がシナモンを採集する方法は、右の場合よりもさらに驚くべきものである。この香料がどこに生ずるのか、どこ土地がその産地であるのかを彼らは知らないのである。ただ、むかしディオニコッソスが養われた土地がその産地であるという説を成すものがあるが、これにはもつともらしいふしもある。

その説によると、われわれがフェニキア人から教えられた言葉でシナモン（キナモーン）と呼んでいる乾いた棒切れは巨大な鳥が運んでくるもので、鳥は人間の足の及ばぬ山の断崖に土で作りつけた巢を仕上げるために、この棒切れを運ぶのであるという。そこでアラビア人の考案した工夫というのは、死んだ牛や驢馬やその他の荷曳用の獣の四肢をなるべく大きく切つてその場所へ運び、これを巢の近くに置いて遠くへ離れる。鳥は舞い下りてきて獣の肢を巢へ運んでゆくが、巢は重みに耐えかねて地上へ崩れ落ちる。アラビア人はそこへ行つて集める、というのである。そしてこのようにして採取されたシナモンは、そこから他の国々へ輸出されるのであると。

アラビア人の言葉ではラダノンというレダノンの採れる経路は、右のものよりも一層珍しい。世にも香しいものが、またとなく悪臭を放つものの中に生ずるからで、この香は灌木から分泌され雄山羊の髭の中に膠のようにこびりついているのが見られるのである。この香は多くの他種の香油の調整に用いられ、アラビア人はこれを特に焚き香として好んで用いる。

香料については以上の記述にとどめるが、実際アラビアの土地からは、いうにいえぬ快い芳香が漂い出ているのである。

アラビアには二種の羊があり、これは他のどこにも見られぬもので、まことに驚異に値する。その内の一種は尾が長く三ペキユスを下らない。もしそのまま引き摺らせておけば、尾が地面に擦れて擦り傷がつくはずである。ところが羊飼たちはい

れも良い大工の腕をもつていて、小さい車を作つてこれを尾の端に結びつける。一頭ずつ羊の尾を、その車一つずつに縛りつけるのである。もう一種類の羊の方は、幅一ペキユスもある幅の広い尾をもっている。

（巻三）

後代のマルコポーロ（一二五〇—一三二四）の『東方見聞録』にも香料や香辛料についての記載があるが、ヘロドトスの右の記述は『東方見聞録』が人々に知られる以前の時代における香料や香辛料の産地についての情報源の一つだったのであろうか。西欧におけるギリシア語文献の知識は西ローマ帝国の凋落後十二世紀ルネサンスまでほぼ途絶えたとされるが、香料や香辛料を求める西欧の人々にとつてヘロドトスの記述が間接的にでも情報源になった事があるのかどうかは気になるところである。いずれにしてもこの叙述は、乳香を産する木の幹を埋め尽くす色とりどりの有翼の蛇、シナモンを採取する時に巨大な鳥をうまく利用するところなど（巨大な鳥を利用する点で『千夜一夜物語』のシンドバードの冒険を想起させる）、真偽のほどはともかく読者を飽きさせない魅力に富んでいる。

次にペルシアについてである。ヘロドトスの『歴史』に於てはペルシア戦争が中心の主題となつており、この書物の性格上、ペルシア（アケメネス朝）は一貫して専制の帝国として描かれている。この事については別稿¹⁶でふれたので詳細は割愛するが、巨視的な点のみ述べると、ヘロドトスがペルシアの特徴として描く専制の伝統は、彼の時代の後もイランの地にササン朝をはじめとする王朝の伝統が

ほぼ一貫して存在した事を現代の読者に想起させる。十六世紀以降を見てこの地にはサファヴィー朝、カージャール朝、パフラヴィー朝が興亡し、イマームに超人的属性や権威を認めるシーア派が信仰の主流となったのもサファヴィー朝時代であった。二十世紀後半まで続くパフラヴィー朝の絶対王政的な性格もイランにおける古代以来の王朝の伝統と全く無縁ではない様に思われる。他方この王朝を倒したイラン革命の指導者ホメイニーの「法学者の統治」(ヴェレーヤテ・ファキーフ)論は、イスラーム法学者に宗教的指導権のみならず政治的指導権をも認めており、特定の階層への権力の集中を正当化する点で、皮肉にも彼が批判した王政の権威主義とも多くの共通性を持つていたと言えよう。かくしてイラン革命の結果成立したイラン・イスラーム共和国ではシャリーに代わってウラマーが指導権を持つ権威主義的な政治が概ね続き、昨今でもヒジャブの着け方に問題があるという理由で若い女性が当局に拘束され死亡した事件に象徴される様に、自由や多様性を抑圧する政策が続いている。この様な現代イランの問題に関心を持つ者が古代ペルシア帝国の専制的な性格についてのヘロドトスの記述を読むと、特定の土地に強固に確立された社会の思考様式は、二千年以上の歳月にも耐え得る意外に強い一貫性や不変性を持つ事があり、当然その間に変容や変革の試みはあるものの、大きな趨勢としてその地の伝統となつて受け継がれてゆく事もあるのではないか(ヘロドトスが「慣習の力」に注目するのも頷ける)、という思いに捉えられるのである。

ここで「その様に古い時代と現代の連続性を論じるのは穿ちすぎではないか」「古代からの連続を強調するのはオリエンタリズム的な偏見である」という、現代地域研究者の批判が聞こえてきそうである。しかしそれに対しては些か反論を試みたい。——日本では、神仏を尊び花鳥風月などの自然美に感情移入する日本の「伝統」を古代からのものとして考える傾向が大いにあるのではないか。日本で学校教育を受けた人で、例えば『万葉集』や『古今和歌集』、『源氏物語』や『平家物語』に表出されている美意識や人生観、生活上の様々な慣習や信仰、天皇制の伝統などについて、古い時代からの連続性を荒唐無稽なものとして頭から否定する人は稀であると思われる。この様に日本史や日本文化論ではあまり疑問視される事もなく広く認められている^古代からの伝統の連続性^の側面を、日本以外の地域については「証拠がない」「時代が離れすぎていて研究には値しない」「偏見である」として暗黙裡にでも斥ける傾向があるとすれば、それは何故なのだろうか。専門分化のせいもあるうが、日本以外の地域についての近年の日本の地域研究や現代史研究に於て、時として古代についての知見が軽視されがちな傾向があるのを私はしばしば感じ、疑問を抱いてきた。これを機に書き留めておきたいと思うものである。

現代を考える上で古代は軽視できないという視点から見た際に、既に述べた以外で目を引くヘロドトスの叙述の一つとして、ペルシア人が太古から「日、月、地、火、水を祭る」(巻二)²⁰というものがある。火を祭るとするのはゾロアスター教との関わりを想起させ

るが、太陽や月を祭るといふのは今日のイラク等に住む少数派の宗教であるヤズイード教（孔雀天使を崇拜するが太陽と月に対しても崇敬の念を持つ）との関連性を思わせる。ヤズイード教は様々な宗教の要素が混淆しているためムスリムから迫害されてきた歴史を持つが、古代ペルシアに由来する日月への崇敬などの慣習を後代のイスラーム等の諸要素と混淆させて今日に至っていると見れば、かなり自然にこの宗教の性格を理解できる様に思われる。この様に古代ペルシアの信仰についてのヘロドトスの記述は、現代の西アジアで命脈を保つ少数派宗教の起源を考える上でも貴重な知見を含む事が見てとれる。

ペルシア人の習慣や性格についてのヘロドトスの記述も、その後の歴史の展開を視野に入れると現代の読者を頷かせるものがある。例えば誕生日を大切にし、ギリシア人と比べてデザートも含め豪華な御馳走を重んじ、酒は社会生活に欠かせないという以下の描写などはどうであろうか。

ペルシアではどの日よりも、自分の誕生日を一番大切にする習慣がある。そしてこの日には、ほかの日よりも沢山の食事を出すのが当然であると考えている。誕生日には金持は牛、馬、駱駝、騾馬などをオープンで丸焼きにして馳走に供するが、貧しい者は小さい家畜を使う。ペルシア人は主食は僅かしかとらないが、デザートはたっぷり、しかも一どきでなく次から次へとでる。ペルシア人がギリシア人は食事を終えてからも腹を空

かしているというのはそのためで、ギリシアでは主な食事がすんでから、これはという程のものは何も出ないからいけない、もし出ればギリシア人でも食べやめないだろう、というのである。

ペルシア人の酒好きは大変なものであるが、ペルシアでは人前で吐いたり、放尿したりすることは許されない。右のことは厳重に守られているが、ペルシア人には、きわめて重要な事柄を、酒を飲みながら相談する習慣がある。その相談で皆が賛成したことを、相談会の会場になった家の主人が、翌日しらふでいる一同に提起し、しらふの時にも賛成ということになれば採用し、そうでなければ廃案にする。またしらふで予備相談をしたことは、酒の席で改めて決定するのである。（巻一）²²

ヘロドトスは続けて次の様にも述べる。

世界中でペルシア人ほど外国の風習をとり入れる民族はいない。メディアの衣裳が自国のものより美しいというので、それを着用するし、戦争にはエジプト式の胸当てを付けてゆく。またあらゆる種類の享楽を習い覚えてこれに耽溺するが、ギリシア人から習って少年と交わるのもその好例である。またペルシア人は誰でも多数の正妻を娶り、さらに多数の妾を買うのである。（巻一）²³

誕生日を重視する習慣は、後世のイスラーム圏におけるマウリド（預言者ムハンマドやイスラームで崇敬されている聖者の生誕祭）の伝統を思わせる。また「デザートたっぷり」の御馳走や、酒を伴う社交、多くの妻妾を持つペルシアの伝統へのヘロドトスの言及に、『千夜一夜物語』の華やかな宴の場面を連想する現代の読者もいるであろう。以下は『千夜一夜物語』の中の、夜の宴の準備をする若い娘の描写である。

やがて、娘は果物類を売っている店の前に立ちどまり、シリア産の林檎、オスマーンのまるめろの実、オマーン産の桃、アレppoのジャスミン、ダマスクスの睡蓮、やわらかな胡瓜、エジプト産のレモン、スルターン種のオレンジ、香りのよいミルク（てんにん花）、タマリンド、ひな菊、アネモネ、すみれ、ざくろの花、野ばらの花などを買いこみました。・・・
やがて娘は肉屋のところで立ちどまり、「肉を十ポンド切つて下さいな」と申しました。・・・

つぎにその娘は乾物屋の前で足をとめ、食後のつまみものにするフスタシウの種だとか、ティハーマ（アラビアの西海岸）の乾葡萄、アーモンド（扁桃）などを買いもとめました。・・・
今度は菓子屋の前に立ちどまりました。そしてお皿を買って、それにムシヤツバク（お煎餅）だとか、麝香いりのカタアイフ（ドーナツの類）だとか、サーブニーヤ（扁桃餅）だとか、レモンのアクラース（パイの類）だとか、ザイナブの櫛（砂糖菓

子の類）だとか、指菓子（指形の菓子パン）だとか、法官のラキーマート（揚げ菓子の類）などそこで売っているあらゆる種類のもののでその皿をいっぱいにみえました。・・・

それから今度は香料商の店に立ちより、薔薇の香水、オレンジの花の香水、睡蓮の香水、ヒラーフ（柳）水などなど十種類の香水を買い、また砂糖をふたかたまり買い、さらに麝香いりの薔薇水のふりかけ瓶をひとつ、乳香や沈香、竜涎香、麝香などをそれぞれそこばくの量を買って求め、そのうえにアレクサンドリアの蠟燭をも買い、これらをみんな籠にいれて、「あなたの籠をかついで、あたしについていらっしやいな」と申しました。
〔荷担ぎやと三人の娘の物語⁽²⁾〕

この「長いまつげとまぶたをもった一双の漆黒の目」を持った艶やかな娘は、ある邸宅の宴の支度の買い物に遣わされた家政婦であったが、この娘の荷物持ちを頼まれた荷担ぎやが邸宅に行くと、門を開けてくれた娘もまた、荷担ぎやの分別心を失わせてしまうほどの美女であった。「その額は花のように白く、その頬はアネモネの花のようにつまみものに、そのふたつのまなこは若い牝の野牛かガゼル（かもしかの一種）の目のごとく、その眉毛はラマダーンの月に立ちのぼる新月かのごとく、口もとはソロモンの印章のごとく、唇は珊瑚のように赤く、その歯は真珠を綴りつらねたか、あるいは菊の花びらをならべたのにも似ていました。またうなじはかもしかのそれをも思わせ、胸のふくらみは大理石の水盤のごとく、乳房は

柘榴の実をふたつならべたようです⁽²⁵⁾。荷担ぎやが贅を尽くした客間に通されると、今度は真珠を散りばめた天蓋の垂れ下がる寝台の中から、この家の女主人の一人である絶世の美女が姿を現す。

・・・その両眼は人々を悩殺し、色白の面で、あたかも月にも似た可憐さがありました。またその眉毛は弓のごとく弧をえがき、その背丈はアラビア文字のアリフのようにすんなりと高く、その息は竜涎香のようなかおりがし、唇は紅玉髓のごとくくれないで、砂糖のように甘い味わいがありました。その容顏の輝かしさは照りわたる太陽をも恥ずかしがらせ、大空の星か、黄金をかぶせた円蓋、またはこの上なしの意匠に装をこらした花嫁御寮、はたまたアラビアの高貴な乙女かと思うほどでした。
た。・・・
(同上)⁽²⁶⁾

この邸宅の娘たちに見ほれてしまった荷担ぎやは「この家には酒だとか、果物類だとか、とりどりの花、お菓子のたぐい、香料類、その他のものなどがあるのも見てとり、ただただ驚いて」立ち去りがたくなり、結局頼み込んで、ある条件の下に宴を共にする事になる。そして酒を酌み交わしながらこの邸宅の美女たちと戯れる事になるのだが、酔いが回った頃、最年長で最も美しい娘が衣裳を脱ぎ捨て、客間の中央に据えてある泉水に飛び込んで「あたかも雲間にさしいでる月の片影かと思えばかり、その容顏は満月か、はたまたさしのぼる朝の陽にもたぐえんばかり」の姿をさらし、水から出た

後も男に身を投げかけ戯れるのであった。更に男は頼み込んで夜の宴にもいさせてもらう事になり、娘たちと食べたり飲んだり戯れたりし続ける。「・・・家政係りの娘は立ち上がって、みんなに料理をすすめ、一同で食事いたしました。それから娘たちは蠟燭やランプに火をともし、蠟燭には竜涎香や沈香を焚きいれました。また酒宴の場所をかえ、新鮮な果物や飲み物類を運び、そこに席を始めて飲んだり、恋物語りなどにふけりました⁽²⁷⁾」。そこへ左目の潰れた三人のペルシアのカランダール(イスラームの遊行僧)が門をたたき、酒宴に加わり、酔いが回った頃「モスルの手太鼓とイラクのリユート(ウード)とペルシアの堅琴」を遊行僧が奏でつつ歌うに至って、宴もたけなわになる。・・・

実はこの物語の舞台はバグダードであるが、『千夜一夜物語』はその成立過程で古代インド、ペルシア、ギリシア等の説話の影響を受けており、それらの多様な要素が後にイスラーム思想に合う様に変容していったとされる⁽²⁸⁾。従ってアラブ的な舞台設定の物語の中に、ヘロドトスがペルシア人の特徴として語った様な雰囲気⁽²⁹⁾が濃厚に漂っていたとしても不思議ではない。右に引用した物語における宴の艶めかしく享樂的な雰囲気、特に酩酊するほど酒盛りをしたり(イスラームの「遊行僧」も酒宴に参加している)、男女が裸身で戯れ合う描写は、酒(ハムル)の禁止や性的倫理性が強調されるクルアーン⁽³⁰⁾の規範とは明らかに別系統の文化的伝統が混在している事を感じさせる。異国の風習を取り入れるに巧みであるというヘロドトスのペルシア人評も、後代にイランの人々が言語をはじめとする古

来の文化をイスラームと融合させてイラン的なイスラーム文明の繊細な華を咲かせた歴史を振り返る時、本質を突いた指摘であると思わざるを得ない。

さて、これまで地誌的側面を中心にヘロドトスの『歴史』の魅力を述べてきたが、ここで同書のもう一つの魅力とも言える運命観にふれて小文を結ぶ事としたい。訳者の松平千秋氏によると同書では「神託や預言が極めて重大な役割」を果たしているが、「ギリシア本土においては、彼と同時代の知識人の多くにとつて、このような運命観や信仰はすでに時代遅れと見なされていた」という。『歴史』の中には、神託と予言は下つた時には意味が分からず、或いは当人が全く勘違いして理解していたが最後に神託の真意を悟るといふ後代のシェイクスピアの悲劇『マクベス』を連想させる様な話が挿入されている。ペルシアの君主カンビユセスの末路の話が一例として挙げられるが、カンビユセスの暴虐残忍ぶりが描き尽くされた後だけに、その最期の描写は劇的である。

・・・致命の傷と観念したカンビユセスは、この町の名は何とこののかと訊ねた。問われた者たちはアグバタナであると答えたが、実はこれより先カンビユセスは、アグバタナで生涯を閉じるというプロトの町からの神託を授かっていたのである。当人は自分の本拠であるメディアアのアグバタナで天寿を全うするつもりであったが、託宣の告げたのは実はシリアのアグバタナであったのである。

さてカンビユセスはこのとき町の名を訊ねてそれを知ると、マゴスの反乱という災厄と負傷という二つの痛手によってようやく正気にかえり、神託の真意を悟っていた。「さればキエロスの子カンビユセスは、この地で果てるさだめなのだ。」

(巻三)

その後カンビユセスは重臣を集めて遺言し、「つくづくわが身の運命をかちさめざめと泣いた」。重臣たちも落涙し悲嘆にくれたが、カンビユセスは傷の悪化により間もなく息絶えるのであった。読者はこの巧みな筆運びによって、さながら王の死という「落日」の後の、因果応報の深い闇の中に取り残されるのである。

ヘロドトスは古代ギリシアの伝統的な運命観をペルシア人に投影して叙述したのであるか。その様な部分もないとは言えないであろうが、ペルシア側にも同様の運命観が存在した事をより強く示唆する箇所はある。例えばヘロドトスは、彼自身がオルコメノスのテルサンドロスから聞いたとして次の様な話を挿入しているのである。テルサンドロスが、一緒に会食していたペルシア人が自軍はやがて壊滅的な打撃を受けるだろうと予言したのに驚いてその話はペルシア側に話すべきだと言ったところ、そのペルシア人はこう言ったという。

異国の方よ、神意によって起るべき運命にあることは、人間の手にその進路をそらせる方策はない。信ずべきことを口にし

ても、誰ひとり耳をかそうとはせぬ。ペルシア人の中にも、い
ま私が申したようなことを認識しているものは決して少なくは
ない。しかしわれわれはみな「必然」の力に金縛りにされ、成
行きに従っているにすぎぬのだ。この世でなにが悲しいといっ
て、自分がいろいろのことを知りながら、無力のためにそれに
どうにもできぬことほど悲しいことはない。(巻九)

ギリシアにもペルシアにも存在したと推定されるこの様な運命観
が、ヘロドトスの時代から千年以上を経た西アジアに発祥するイス
ラームの「定命」の教えと酷似している事に注目したくなるのは私
だけであろうか。ヘロドトスがペルシア人の言として引用している
「神意によつて起るべき運命にあることは、人間の手でその進路を
そらせる方策はない」という思想は、イスラームが発祥した後にな
立している『千夜一夜物語』の中でも酷似した形で語られている。
例えば「ハデイブの子のアジープ」は、宝石商人の息子を殺す運
命を予言されていたが、偶然の経緯からその少年に出会う。仲睦ま
じく暫く共に暮らすうち少年に頼まれて西瓜を切る事になり、果物
ナイフを持って転んだ拍子に少年を刺してしまう。予言が思わぬや
り方で実現された事を知った利那にアジープが叫んだ次の言葉は、
イスラーム的な表現ではあるが人生の残酷な不条理に対する苦悶を
ほとばしらせており、ヘロドトスの記す古代ペルシア人の先の言と
深い共通性を持っている。

わたくしどもはアッラーのお創りになったもので、みもとに
帰りゆくものでございます。ああ、ムスリムーン（イスラム教
徒）よ、これなる若者には占星家や賢者たちが、四十日で満了
すると告げた、あの危険な時期が、もうあとたった一晚だけし
か残っていないかったです。しかもこの美少年の宿命的な死は
わたくしの手からして起こったのです。ああ、いっその自分
の方が先に死ぬか、こんな西瓜など切ろうとしなければよかつ
たのに！これが不幸でなくて、苦痛でなくてなんであろうか
けれどアッラーが定めたもうたことは、必ず実行されるのだか
らなあ！

（「荷担ぎやと三人の娘の物語」より「第三の遊行僧の話」）

ヘロドトスの『歴史』の記述は、近代以降の考古学等の研究の進
展によつてその信憑性が意外に高い事が明らかになったが、同書へ
の評価が高まった十八世紀以降もトゥキユデイデスの『戦史』と比
較した際の実証性の弱さを指摘される事もあった。しかしたとえ
個々の挿話の信憑性に疑義なしとは言えないにしても、『歴史』は
集団のみならず、時に個人にも目を注いだ叙述によつて人間の深い
真実を描き出しており、この点で数百年後に書かれた司馬遷の『史
記』の本紀や列伝の精神とも共通する。また同書の至る所に挿入さ
れた地誌は、観察と経験、具体的な事実こそが歴史叙述の基礎であ
るといふ、主題としての戦争史をも貫く揺るぎない哲学と異境に対
する作者の新鮮な関心とに支えられ、イスラーム到来以前の西アジ

アの伝統と、所謂「イスラームの伝統」とされるものの幾つかが実は連続している可能性をも現代の読者に示唆している。その連続性を感じさせる要素の一つである「定命」、すなわち人間の避けられぬ宿命に対する畏怖と諦念の思想は、さながらペルシア戦争をモチーフとする華麗な絨毯に織り込まれた陰影を帯びる糸の如くである。その陰影や、それを見つめる著者自身の哀感が織り込まれていなければ、いかに描写が巧みであつてもこの作品はごくありふれた戦記物語に終わつていたのではないか。

古典における普遍とは何か、とは古くて新しい問いである。普遍とは恐らく、万人を一通り納得させる無色透明な事実の羅列ではない。極端な言を許されるとすれば、日本古典を愛する者にとつて「宇治十帖」なき『源氏物語』や、「灌頂卷」を欠いた『平家物語』は考えられない。たとえ後世の者から見て時代遅れであつたり「迷信」が含まれる様に見えたとしても、著者個人の人生観や、その背後にある著者の生きた時代と地域に密着した思想などのある種の「色」、誤解を恐れずに言えば「偏見」が、文学と歴史学とはその必要量や中味に相違はあるかも知れないが、ある著作を不朽にする不可欠な要素であると私には思われる。仮にヘロドトスの『歴史』が検証され尽くした「科学的事実」のみの叙述で埋め尽くされていたら、豪華絢爛たる戦記物語で終わつていたとしたら、これほどの哀切、これほどの迫力を二千数百年余り後の者に感じさせただろうか。既に述べた様に、当時にあつてさえヘロドトスの運命観は時代遅れで保守的であつた。しかし作者のその様な具体的な偽らざる人

生観、人間観をどこかににじませた不器用な「歪み」や陰影こそ、逆説的ではあるが古典における深い意味での、「普遍」の条件なのだろう。

註

- (1) 生没年は紀元前四八五年頃〜前四二五年頃が定説となっているが、詳らかでない。
- (2) 森まり子「ウッドロウ・ウィルソンと十八〜十九世紀英米の政治思想——民主主義と専制、古代ギリシア、オスマン帝国をめぐって——」『跡見学園女子大学文学部紀要』第五八号、跡見学園女子大学、二〇二三年三月刊行予定。
- (3) なお本稿は、表題の掲載されている頁の欄外にある『藤の裏葉——古典の陰影を読む』という学術エッセイ集の一部と考えて執筆したものである。「藤の裏葉」は『源氏物語』第三三帖の巻名。「春日さす藤の裏葉のうらとけて君し思はば我も頼まむ」に由来する。
- (4) ヘロドトス著、松平千秋訳『歴史』下巻、岩波文庫、二〇二二年、二六六〜二六七頁。引用文中の点線は省略部分を示す（以下同じ）。
- (5) ミダスはギリシア神話中のプリュギアの王で、手に触れる物をこごとく黄金と化した。優れた薔薇の庭師でもあつた。
- (6) ヘロドトスの旅行は十年余りの間に幾度かにわたつて行われたものと思われ、東はバビロンないしエジプト、西はリビアのキュレネ、バルケ、南はナイル上流、北はクリミア半島、ウクライナ南部辺りにまで足を伸ばした事がほぼ確実視されている（松平千秋『解説』四三〇〜四三二頁、ヘロドトス著『歴史』下巻）。
- (7) ヘロドトス著『歴史』上巻、三五五頁。
- (8) オリエンツの中ではインドとエチオピアについても興味深い記載があるが、

論旨の流れの都合上、本文では割愛せざるを得ないのでここに概略を記す。「インド人」はインダス川以東の住民を全て指している様であり（訳注、ヘロドトス著『歴史』上巻、五二二頁）、インドはアジアの最東端でその先は無人とされているため、中国についての記載はない。以下インドの記述の中でも強調されている、金の産出についての記載を抜粋する。「インド人はわれわれの知る限り世界中で飛び抜けて最大の民族で、他のすべての納税額の合計にも匹敵するほどの、砂金三百六十タラントンを納入する。これが第二十徴税区である」（巻三。パルシアのダレイオスがサトラペイアという二十の行政区を制定し、遠隔地にある民族についてはいづれかの行政区にふり当て、民族別に納税額を定めたという文脈の記述。上巻、四〇四頁）。「インド人がパルシア王に納める上述の砂金は、インド人の保有する莫大な金の一部であるが、彼らがその金を採取する方法は次に述べるとおりである。インド人の国土の東方は砂漠を成し、実際われわれの知る限り、またわれわれが多少とも確實な知識をもっている限りにおいて、アジアに住む人類の内ではインド人が最東端の民族なのである。インドの東方は砂漠を成しているため全く無人の境だからである」（上巻、四〇六頁）。ヘロドトスは金の採取方法について詳細に説明した後、「……インドには金が無尽蔵で、採掘されるものもあれば、河川によって流されてくるものもあり、また先に述べたように（蟻から）奪ってくるものもある。またインドでは野生の木が（羊）毛の実を結び、この（羊）毛は外見も質も羊からとった毛に優る。インド人はこの木（の実）で作った衣類を用いているのである」（上巻、四一〇頁）と述べ、インドが綿を産する事にも言及している。エチオピアについては次の様に述べる。「南が西に傾いている方角では、エチオピアが人の住む世界の涯になる。この国は多量の金、巨大な象、さまざまな野生の樹木に黒檀を産し、この国の住民は世界中で体軀はもつとも大きく、容姿は最も美しく、寿命は最も長い」（上巻、四一四―四一五頁）。

- (9) ヘロドトス著『歴史』上巻、二二四―二二五頁。
 (10) ヘロドトス著『歴史』上巻、二四四頁。
 (11) ヘロドトス著『歴史』上巻、二二一―二二二頁。
 (12) ヘロドトス著『歴史』上巻、二五七―二五八頁。
 (13) 割礼が純粹な意味でのイスラーム的慣習とは言えない事は様々な研究が指摘するところである一方、日本では例えば「イスラームにおける」男児の割礼はあきらかにユダヤ教から受け継がれたものである（塩尻和子・池田美佐子編『イスラームの生活を知る事典』東京堂出版、二〇〇六年、一三七頁）といった「先行宗教からの継承」をとりわけ強調する説明が見られる。ユダヤ教に割礼の慣習がある事は事実であるが、ヘロドトスの記述は割礼の大元の起源がむしろ古代エジプトにあり、西アジアの慣習として広まっていたものを、西アジアに勃興した諸宗教が「地域的慣習として」受容した可能性もある事を示唆している様に見える。
- (14) ヘロドトス著『歴史』上巻、三二八頁。
 (15) ヘロドトス著『歴史』上巻、四一〇―四一四頁。
 (16) 森まり子「ウッドロウ・ウィルソンと十八―十九世紀英米の政治思想」（前掲）。
- (17) 正確に言えば「法学者の統治」論は、預言者から宗教的指導権を伝えられたイマームの系統がガイバ（イマームの「お隠れ」）によって途絶えた後はウラマーがその代理を務めるというシアア派十二イマーム派の考え方が前近代の王朝下で拡大解釈されて発展した延長線上に成立したものであり、従ってホメイニーの純然たる独創ではなく、以前の王朝の伝統との深い関わりの中で形成された理論であった。その意味で、ホメイニーの「法学者の統治」論が王政の権威主義と共通性を持っていたのは、現象としては「皮肉」に見えるが本質を見れば決して偶然ではないと言えよう。概説的説明としてより詳しくは、大塚和夫・小杉泰ほか編『岩波イスラーム辞典』岩波書店、二〇

〇二年、「法学者の統治」項（富田健次執筆）を参照。

(18) 二〇二三年秋のこの事件はイラン内外の大きな批判を呼んだ。

(19) 世界的に見れば、現代の問題と古代とのつながりにも目配りした極めて刺激的な研究成果がある事は強調しておきたい。例えばライラ・アハメド著、林正雄ほか訳『イスラームにおける女性とジェンダー——近代論争の歴史起源——』法政大学出版社、二〇〇〇年。

(20) ヘロドトス著『歴史』上巻、一一二頁。

(21) ヤズィード教における日月への崇敬については、「イスラーム国」に捕われていたヤズィード教徒女性の自伝に描かれている。ナディア・ムラド著、吉井智津訳『私を最後にするために』東洋館出版社、二〇一八年、五〇―五一頁。

(22) ヘロドトス著『歴史』上巻、一一二―一一三頁。

(23) ヘロドトス著『歴史』上巻、一二四頁。

(24) 前嶋信次訳『アラビアン・ナイト 1』東洋文庫、二〇一三年、一〇五―一〇七頁。

(25) 前嶋訳『アラビアン・ナイト 1』、一〇七頁。

(26) 前嶋訳『アラビアン・ナイト 1』、一〇九頁。

(27) 前嶋訳『アラビアン・ナイト 1』、一一九頁。

(28) 前嶋訳『アラビアン・ナイト 1』、一二二頁。

(29) 前嶋訳『アラビアン・ナイト 1』、一二五頁。前嶋氏はカランダル（ベルシア語）を遊行僧と詩情豊かに訳している。彼らは奇異な風体で放浪し、十一世紀以降イスラーム世界各地に見られる様になった（前掲『岩波イスラーム辞典』、「カランダル」項、矢島洋一執筆）。

(30) 成立の複雑な経緯や諸説の詳細については、前嶋信次著『アラビアン・ナイトの世界』平凡社、一九九五年（初版刊行は一九七〇年）を参照。

(31) 松平「解説」（前掲）、四三九頁。

(32) ヘロドトス著『歴史』上巻、三七七頁。

(33) ヘロドトス著『歴史』上巻、三七九頁。

(34) 松平氏は、『歴史』の中に登場する人物のうちには作者の代弁者の役割を演じていると見られるものもある、と指摘している。松平「解説」（前掲）、四三二―四三三頁。

(35) ヘロドトス著『歴史』下巻、二八六頁。

(36) 前嶋訳『アラビアン・ナイト 1』、一一〇三頁。

(37) 松平「解説」（前掲）、四四二頁。William Smith, *A History of Greece, from the Earliest Times to the Roman Conquest with Supplementary Chapters on the History of Literature and Art by William Smith, with Notes and a Continuation to the Present Time by C. C. Felton*. Boston: Hekling, Swan, and Brewer, 1857, p.223.